

日本人が「ブミプトラ」になる日に向けて

金子芳樹

1993年に第2回JAMS研究大会が開催された三重県の松阪大学(その後、三重中京大学と改称)が新規学生募集の停止を決め、4年後に廃校となる。あの大会の懇親会は松阪牛のすき焼きを食べさせる老舗料亭で、大学から費用の3分の2の補助を受けて開催された。ご記憶の会員もおられよう。当時は受験者数も右肩上がり、大学も太っ腹だった。あれから15年、少子化の直撃を受ける形で、JAMSとも多少の縁がある、そして私の前任校である大学が姿を消すことになった。

少子化問題が叫ばれて久しい。政府や財界でも様々な施策を講じて、1.3以下に落ち込んだ合計特殊出生率の回復を図ろうとしている。とはいえ、その成果はほとんどみえない。最近では、アジアの近隣諸国にも同様の現象が広がるなかで少子化という言葉にも慣れっこになり、また対策といっても託児所増設など目先のニーズが取りざたされるばかりで、肝心の長期的な影響や対策にはなかなか関心が向かない。

しかしこれは、国民国家の維持という観点からは極めて重大な問題である。政策立案上の根拠となる国立社会保障・人口問題研究所の人口予測によると、比較的楽観的な中位推計でも50年後(2059年)の日本の総人口は8567万人、約100年後(2105年)には4459万人になると見積もられている。「日本人」という民族カテゴリーは50年後に今の3分の2、100年後には3分の1にまで縮小してしまう。まさに国家・民族存亡の危機である。

100年後に国民国家が現在の形で残存しているか、またその必要があるかどうかは別にして、そう遠くない将来、日本でも少子化の先に来る小人口化問題を直視せざるを得ない時が来よう。ただ選択肢はそう多くない。基本的には、減りゆく日本人で小国化する日本を支えるか、外国人を取り込んである程度の人口規模を保とうとするかだ。

ヨーロッパの先進諸国では1980年代から少子化・小人口化問題が大きな社会問題となり、その対策として、大胆な出生力回復政策とともに移住労働力に門戸を開く移民政策が採用されてきた。1980年代まではEU域内から、それ以後はEU圏外の北アフリカ、中東、南アジア地域から多くの移住労働者が流入した。また、彼らやその子孫を国民化する制度改革も進められた。古くから国籍法に出生地主義を取り入れてきたフランスはもとより、長らく血統主義にこだわってきたドイツでも1999年の国籍法改正によって出生地主義の導入や帰化条件の緩和が図られた。

フランスは1990年代に1.6台にまで下落した合計特殊出生率を10年間で2.0に戻した少子化対策の成功国として脚光を浴びるが、じつはこれには元々出生率の高い移民の寄与が大きい。また、現在の経済危機前のEU諸国の経済復興を支えた要因として、東欧・旧ソ連市場の登場やEU統合の

効果とともに、EU 圏外からの労働者を積極的に受け入れる柔軟な労働市場の役割も見逃せない。

一方、毎年 100 万人規模の移民が流入する移民立国アメリカでも、将来の国家像を示唆する予測が最近示された。ヒスパニック系やアジア系の移民の増加の結果、2050 年にヨーロッパ系白人が総人口の半数を割るというのだ。また、経済危機によって白人主導で保守的な東部の自動車産業が衰退するなか、多民族なカリフォルニアを土壌に多文化な気質を持った企業(シリコンバレーのアップルやグーグルのような)が気を吐いている。

翻って日本はどうか。今までのところ、我が道を行く、である。というより、日本では、社会的摩擦が増える、治安が悪化する、(何となく)移民が嫌い、といった理由で、外国人やその子孫を国内の労働力として、ひいては将来の国民として受け入れるかどうかについて正面から議論することを避けてきた面が強い。日本政府の政策には、移民を受け入れるか否かの原則を論じないまま国内産業の当面のニーズに応える中途半端な施策ばかりが目につく。

仮にこの問題が国家的アジェンダとして議論の俎上にのぼったとして、どのような方向に議論が進むのかまったく予想はつかないが、何らかの制御の下に移民を一定の規模で受け入れるという結論も想定可能であろう。50 年間で減少する日本人 4000 万人分の移民を導入することはあり得ないとしても、年に何万人かずつ受け入れるというのは西欧の例をみてもさほど非現実的な話ではない。現在でも多民族化はある程度進行しているが、西欧並の移民受入国となれば、しばらくするうちに日本も晴れて世界標準の多民族国家の仲間入りとなる。もちろん、種々様々な効果、影響、問題が出てこよう。

マレーシアに最初に関心を持ったころ、「典型的な多民族国家」という言葉に惹かれたのを覚えている。マレーシアのみならず東南アジアの民族や文化について日本人が研究する際、一般に日本にはない多民族、多文化社会を扱っているという意識でのぞんでいるのではないだろうか。実際、ブミプトラの気持ちを理解しようと試みたり、少数民族の立場に立ってみようと思像力を働かせてみても、生まれ育った環境からなかなか実感がわかないものである。また、マレーシアの多民族社会に関する研究成果を、民族・文化に多様性が乏しい日本で応用したり、教訓にしたり、政策提言したりするチャンスも多くなかった。

しかし、である。日本が近い将来、移民を受け入れて多民族国家に向かってひた走るとすれば、状況は変わる。「日本人」はこの国の「ブミプトラ」となり、より勤勉な移民集団から生活権をどう守ろうかと悩んだり、移民集団が持ち込んだ様々な文化的異物とどう折り合いをつけるかに腐心したりするかもしれない。いよいよマレーシア研究者、東南アジア研究者の出番である・・・

新型インフルエンザの熱に浮かされながら、こんな風景が頭のなかで渦巻いていた。